

平成 26 年 1 月 10 日

題名

氏名

木森 圭一郎

印

題名 江戸時代解剖図の展開～『解体新書』から『重訂解体新書』まで～

要旨

本論の目的は2点ある。1つ目は日本の18世紀の中期ごろから19世紀初頭の江戸時代に編纂された解剖図に着目し、これまで美術史では絵師の画業の補足的に扱われることの多かった解剖図に、それ自体がもつ美術性と造形性を明らかにすること。もう1つは、その後それらの研究成果を着想元に筆者の絵画制作に活かすことである。

本論1～2部は1つ目の仮題である江戸時代の解剖図の美術性・造形性について、3部はそれらの研究過程で制作された作品と江戸の解剖図の関係性についてそれぞれ論述した。

1～2部の論述にあたり研究対象としたのは7冊の日本の解剖書『解体新書(附図)』、『平次郎臓図(模本)』、『施薬院解男体臓図(模本)』、『医範提綱内象銅版図』、『解剖存真図(模本)』、『把爾翁湮解剖図譜』、『重訂解体新書銅板全図』の各挿図であるが、これらの解剖書は『解体新書』刊行から、その改訂版である『重訂解体新書』刊行までの解剖書で、著名でかつ絵師の来歴が明らかなものから選出した。

『解体新書』以前の解剖書は本文の補足的側面が多く、また描いた者も専門の絵師ではなく本文を執筆した医師かその弟子である場合が多かった為、プリミティブな魅力はあるが、そのもの自体の美術性を問うことは非常に困難である。しかし『解体新書』以降の解剖書では、解剖図作成の際に専門の絵師を採用し、挿図に美術的志向が強くなっている。『解体新書』はオランダ語の解剖書通称『ターヘル・アナトミア』の翻訳書であるが、原本となったヨーロッパの解剖図の鮮烈で写実的な挿図も、当時の技術で出来る限り模倣された。当時の日本の医学界にセンセーショナルに迎えられた『解体新書』は、それ以後の解剖図に影響を与えた。

杉田玄白が属する江戸のオランダ医学の一派を「蘭方医」といったが、杉田流の蘭方医らは自派のオランダ語学力を活かし、ヨーロッパの画法書を翻訳し、日本初の腐食銅版画家 司馬江漢に協力したほか、その後自派の解剖図に腐食銅版画を採用している。また京都では、杉田玄白と交友のある小石元俊という漢方医が、自身の解剖結果を円山派絵師に写生技法で描かせた。『解体新書』以後の解剖書は、その本文の内容だけでなく図像的にも様々な創意工夫がなされたのである。

このように一見絵師の個性が立ち入る余地の無いような医学用の解剖図であっても詳細に検討することで、各解剖図には限られた範囲での絵師の造形性が存在することが分かった。特に円山派の絵師を起用し率直な写生結果をもとに描かれたかのような小石流の解剖図が、以外にも『解体新書』等のヨーロッパの図示法を参考にしていたことや、オランダ医学の普及を目的に編纂され、ヨーロッパの解剖図の複製を到達点とした江戸の蘭方医学解剖図のほとんどが、原図からのなんらかの意図的な改作をおこなっていたことを明文化できたことは、本研究の成果である。

学位論文の題目 外国語の場合は、日本語訳を付す事。
学位論文の要旨 2,000文字程度
用紙 日本工業規格A4版
(枚数は複数可)

平成 26年 1月 10日

題名 氏名 木森 圭一郎



題名 江戸時代解剖図の展開～『解体新書』から『重訂解体新書』まで～

要旨

3部では江戸の医学解剖図を美術の研究対象に選ぶまでの動機を、筆者の造形的志向性や制作のビジョンとなっていた、中国武術の身体感覚との関係性から述べる。

中国武術で得た身体感覚により筆者は新たな造形的ビジョンを獲得したが、絵画に専念するために中国武術を辞めたことにより、少しずつビジョンが薄れていく。それらを補填する要素を、ヨーロッパの身体観と日本の伝統的身体観の両方が概観できる、日本の18世紀の中期ごろから19世紀初頭の解剖図に求め、それらは私に新たな造形上のインスピレーションを与えた。

それらを筆者の人物造形に活かすときに、江戸蘭方医学の解剖図のような方法論で直接的な図像として引用する場合と、解剖学知識、言い換えれば「人の構造」に関する知識を概念的に応用する場合がある。「概念的応用」の例として一般的なものは、人の重心の位置や骨組みを抽象的に把握し美術造形に活かすことである。

過去を振り返れば、ダビンチやミケランジェロが得た解剖学的知識も、直接的に絵画作品に現れることは少なく、体系的に整理して絵画に応用されており、この系統に属するものであると考えられる。またそこから抽象化の時代を経由した我々現代の芸術家にとっても、こちらの手法の方が馴染みがある。筆者はこれらの研究成果をもとに、絵画作品を制作した。解剖学的知識を直接的に描き構成した「LAND MARK」、概念的に応用した「雨」、「雨」の造形性を再検討した「花束」という大作の絵画作品を制作している。

日本の18世紀中期頃から19世紀初頭の解剖図に着目したことで、解剖図に現れたビジュアルイメージの過渡期の状況を知ることができたことは、筆者の造形上、非常に有意義なものとなった。これらの「人の構造」に関する知識が、ビジュアルイメージとして表出した「直接的引用」と「概念的応用」2類型を、うまく筆者の絵画に差引きしながら引用し、造形性を深めていくことが今後の課題である。

学位論文の題目 外国語の場合は、日本語訳を付す事。
学位論文の要旨 2,000文字程度
用紙 日本工業規格A4版
(枚数は複数可)

学位論文等の審査及び最終試験・学力の結果確認報告書 【D-13】

審査委員

主査：宇田川宣人（九州産業大学芸術学部美術学科教授・指導教授）

副査：松永洋子（九州産業大学芸術学部美術学科教授）

渡邊雄二（九州産業大学芸術学部美術学科教授）

錦織亮介（福岡市美術館長）

氏名：木森圭一郎

学位論文・作品題目：

論文題目：江戸時代解剖図の展開―「解体新書」から「重訂解体新書」まで―

作品題目：1. 「人の形」

2. 「思考の場」

3. 「花束」

学位論文等の審査結果の要旨：

木森氏の論文は、18世紀中期から19世紀初頭の江戸時代に編纂された解剖図について、美術史、絵画史の視点、また造形的観点に立って解剖書の著者と画家達の解剖図作成の経緯とその表現内容について調査研究した論考である。

第1部序論の1章「江戸時代解剖図と先行研究の概要」1節「江戸時代解剖図の概要」では『解体新書』（附図）から、『重訂解体新書銅版全図（じゅうてい [ちょうてい] かいたいしんしょ どうはんぜんず）』までの解剖書の挿図7冊と、それらの挿図作成の際に参考にしたとされるヨーロッパの解剖書11冊の挿図を研究対象に決めた根拠を述べ、それらの解剖図の概要について解説した。また2節「先行研究について」では論者の解剖図研究に係る先行研究について概説した。

特に、江戸蘭方医派と京都小石流漢方医派の2つの解剖図の潮流を整理し、相関関係を図表化し、それらの医派毎の図像的差異を、腐食銅版画や円山派の写実表現等を分析し、明らかにしたことは特筆に値する。

2章の「江戸時代解剖図前史―『和蘭全軀内外分合図（おらんだ ぜんくくないがいはんごうず）』と『蔵志（ぞうし）』―」では、江戸時代の解剖図以前の我が国の解剖図の編纂の状況やその概要、即ち中国の漢方医学の流入から、その後ヨーロッパから流入した解剖図を日本風に改変し描いたものの他、その後我が国で初めて公の許可の元、実際に解剖した模様を観察し、山脇東洋によりその結果をまとめ編纂した『蔵志』についてなどを概説した。特に東洋医学の観点から人体の内部を説明した「内景図」について、図像の内容を美術的な観点から分析して、5系統に分類した。その内訳はA群（モノクロで簡素なもの）、B群（A群の彩色版）、C群（人の内景を地図的に図示したもの）、D群（美術性を重視したもの。大幅の卷子本やそれらに細密な着色が施されたもの等が存在する）、E群（D群と同様に美術性を重視しながら、図像の躍動感を強調したもの）である。

このような医学用の「内景図」に対する、絵画・造形的観点からの分析・研究は他に類が無く高く評価できる。

第2部「江戸時代解剖図の展開」では『解体新書』刊行の1774年から『重訂解体新書』が刊行された1826年までの著名な解剖書のうち、挿図の来歴や制作に関わった絵師が医史学的先行研究により明瞭な解剖書、即ち『解体新書』(附図)、『平次郎臓図(へいじろうぞうず)』『施薬院解男体臓図(せやくいん かいだんたいぞうず)』『医範提綱内象銅版図(いはんていこう ないしょうどうはんず)』『解剖存真図(かいぼうぞんしんず)』『玉函把而翁湮解剖図(ぎょつかん[よはん]ばるへいん かいぼうず)』『重訂解体新書銅版全図』の7冊について、先行研究を引用し、それに論者の新しい考察を加えて概説し、また各解剖書の挿図について、相互に比較・考察し、各図の表現の美術・造形上の特徴を明らかにした。

第2部1章『『解体新書』付図』では杉田玄白の他、江戸蘭方医学者達の『解体新書』編纂に関わる過程において、彼らのオランダ語能力がヨーロッパ原典の解剖図の理解に寄与し、解剖図の再現に際し木版画表現に活かされた他、解剖図の造形表現上の問題点を論述した。2章『『平次郎臓図』』では、京都の漢方医学古方派の医師小石元俊が1783年に編纂した解剖図巻である。本書の挿図を描いた絵師は、円山派の絵師吉村蘭州であり、蘭州を実際に解剖の現場に同席させ、その観察・写生結果を肉筆の彩色画として描いたものである。

このような『平次郎臓図』について造形表現上の特質を考察し分析した本章のなかでも特に、それ以前には無い円山派の写実力ある絵師の彩色画の独創性や、彼らの『解体新書』などの蘭方医学解剖図の図示法の研究成果に基づいた活用を分析し、『平次郎臓図』と『解体新書』の挿図の相関関係を分析した論述は注目に値する。

3章『『施薬院解男体臓図』』においても、円山派絵師らの解剖観察表現の美術・造形的観点からの考察と、参考にしたと考えられる他の解剖図との比較考察を行った。特に医学史の先行研究の記述をヒントに、ステファン・ブランカールト『新訂解剖学』の図示法の影響を受けた可能性についての論述は、特に新鮮な視点である。

4章『『医範提綱内象銅版図』』では、まず1節の『『医範提綱』概要—著者宇田川玄真と百科事典『ショメール』』において、本編である『西説医範提綱釈義』と図版編にあたる『医範提綱内象銅版図』を概説し、著者・訳者の宇田川玄真とヨーロッパの百科事典である、通称『ショメール』について多数の先行研究を整理して概説した。次節『『医範提綱内象銅版図』と銅版画家亜欧堂田善』では挿図を描き腐食銅版面に翻刻した絵師亜欧堂田善の技法習得過程と制作した解剖図の造形性・美術性について、先行研究を踏まえ、その解剖図表現の美術的評価について再検討し論者の新しい見解を論述した。

5章『『解剖存真図』』著者と絵師を兼ねた南小柿寧一の来歴と、この解剖図の概説や造形性を追及した。この卷子本は乾・坤2巻にわたり美しい彩色図が著者本人により挿入されているにもかかわらず、美術史・造形的な研究が特に少ないことを踏まえ、解剖

図をA～C群の3つの系統に分け分析し論述した。A群は原図を尊重し大きな改変を加えない解剖図、B群はヨーロッパの解剖図や小石流解剖図と寧一自身による解剖写生とといったいくつかの類型を任意に複合し描かれた解剖図、C群はオランダの解剖図を参考にしつつも、寧一の解剖結果を重視して描かれた解剖図である。このような解剖図の比較研究は他に類を見ないものであり特筆に値する。

6章『玉函把而翁湮解剖図』では、先行研究を踏まえ解剖書の概説と造形性について述べた。本解剖図は研究対象の7冊の解剖書のうち、もっとも原図との類似が多いものであり、それは模倣技術が向上したことだけでなく、解剖図を描き翻刻した中伊三郎の解剖図絵師としての稀有な資質によるところが大きいものであるとする見解を述べた。

7章『重訂解体新書銅版全図』では、まず1節『重訂解体新書銅版全図』の概要と著者大槻玄沢について」において、医史的な先行研究をもとに、本編『重訂解体新書』と図版編『重訂解体新書銅版全図』について概説し、編著者の大槻玄沢についても解説した。2節『重訂解体新書銅版全図』の表現』では、編纂当時の江戸の松平体制における、洋風画技術者の解剖図表現の成熟度について、さまざまな先行研究を学際的に比較検討し論述した。また、『重訂解体新書銅版全図』の解剖図表現の造形的特徴と、本図作成の際に参考にしたヨーロッパの解剖図を比較分析した。特にこれまで医史学の先行研究ではステファン・ブランカールト『新訂解剖学』からの引用図であるとみなされていた解剖図を、木森氏は詳細な比較検討により、4章で扱った『医範提綱内象銅版図』からの引用であることをつきとめ、明らかにした論考は画期的である。

8章では2部の総論として、造形的観点から考察した研究の成果と今後の研究課題が示された。特に絵師の個性や創造性を必要としない客観的表現が求められる解剖図においても限られた範囲で、絵師の独創性が確認できることについての論述は興味深い。また、実際に解剖を観察して写生し描かれた小石流の解剖図であっても、『解体新書』の解剖図の影響が強いことを明らかにした点も本研究の大きな成果である。

この論文の成果についての要旨をまとめると、1.江戸時代の解剖図についての研究のほとんどが医学史の分野からの論考であるなか、絵画的図像の変遷の側面から、即ち、造形的視点から考察している例は、ほとんどない。2.西洋医学の解剖図に啓発され、その日本版の制作が行われてゆくが、西洋解剖書付図からの影響と、日本人が腑分けを行ったときの写生図との関連を、論者は日本の解剖書7冊とヨーロッパの解剖書15冊の付図の綿密な対比を通じて影響関係を明らかにしてゆく。その作業の進め方は実に忍耐強く、詳細、適確であり、その視線は画家を志す制作者ならではのもので、医学史研究者の目では見逃すところを多く指摘し、拾っている。3.医学書の挿絵には厳密な写実性が要求され、画家の創造性や感性が封印された作業であったにもかかわらず、その挿絵に画家としての個性を垣間見て、それを指摘してみせるところには、本論文における

論者の真骨頂がうかがえる。4. 『解体新書』から約50年の解剖書の挿図について、画家・美術家としての造形的視点から、原本も含め丁寧に検討した。日本の版本や西洋の出版物の書誌学的跡付けも十分に行われた。また、関係する解剖図の比較を丹念に行い、画家や編纂者の意図やその時代の絵画表現史の実態を確認すると共に、それ等の作品の特筆と造形性を明らかにした成果は、画期的なものである。5. 別冊の図版編は研究の対象となった江戸時代の解剖図のすべてと、その引用原図の一部がまとめられており、美術・造形的な観点からの研究の貴重な参考資料となると考える。

以上の5点は、博士論文として構成して行くに十分な価値を持つ点である。

木森氏の作品は「人の形」、「思考の場」、「花束」の6点の人体を主題とした絵画作品である。造形の基軸は、ヨーロッパ美術のアカデミズムを中核としながら出発し、石膏、人体デッサンや美術解剖学から得た知識を基盤として、論者が中国武術の身体的体験から得た感性、すなわち陰陽五行説や氣の概念といった抽象的認識と人体を用いた具象的形態により視覚化、絵画化を試みてきた。その際、木森氏の追求している表現に最も影響を与えた絵画は、はりきゅうミュージアム等に所蔵された東洋医学の「内景図」であった。「人の形」は、レオナルド・ダ・ビンチの「ウィトルウィウスの人体図」の表現を、「内景図」の影響下に置きつつ、中国武術の「氣」の概念をさまざまな様態で表した作品である。また「人の形」の発展形として描かれた「思考の場」は、下地をジェッソ樹脂で盛り上げ「氣」の概念の入魂を試み、ヨーロッパの理想的人体造形からの脱却を試み、東洋の純粹美としての人体空間を表現した。これら2点の作品は共に透明水彩絵具で描かれており湿気に弱いのが、描画後にクリアラッカーで画面を保護することでそれを補った。

また本作品は個展での発表後、読売新聞の文化面に掲載され、記事として評価された。

その後「内景図」の考察のなかで、1800年以降の「内景図」の人体像の比率が次第に伸びていく傾向に着目し、その表現のターニングポイントと論者が推察した『解体新書』刊行前後の解剖図を調査研究した。その調査・研究をまとめたものが論者の博士論文1、2部の内容である。

このような江戸時代の解剖図表現の研究過程で、解剖学的知識を直接的に活用した絵画作品が散見されることを論者は認識する。我が国の絵画作品で論者の論文の研究範囲と同世代のものでは円山応挙が描いた「波上白骨座禅図」が代表的な作品であり、また西洋に眼を向ければミハエル・ヴォルゲムートが描いた「死の舞踏」のような類型が存在する。また、レオナルド・ダ・ビンチなどルネッサンスから西洋のアカデミー教育、そしてそれらの潮流に位置する今日のグローバルな芸術教育の中では、人体表現の基盤として美術解剖学を修得するが、その知識や概念は直接的に解剖図を描くのではなく、間接的に活かされることが多いことも再確認した。

これらの調査研究をコンセプトに、人体を主題とし制作した作品が「花束」である。背景がモザイク化された、人体と光の調和を現代絵画として追及した作品となっている。

本作品の前述の「人の形」や「人体考察」と同様に透明水彩で描画後、クリアラッカーで保護・定着させている。また本作品の表現意図に沿ってアクリル性のニスであるグルスポリマーメディウムや、盛り上げ剤のモデリングペーストを適時使用し、描画素材研究の成果も垣間見られる。個展、グループ展、公募展「行動展」に入選するなど社会的評価も高い。

このように論者の作品は解剖図を直接的に絵画表現に活用した作品と、その概念を間接的に表現に活かした作品が存在する。論文と作品の造形思考に人物・人体を通じた共通した意識があり、相互に関連性がある。芸術性・創造性も豊かであり博士作品として相当である。

以上のことから、博士学位論文に値する。

最終試験、学力の確認の結果報告：

最終試験である公聴会における木森氏の発表は「江戸時代解剖図の展開-解体新書から重訂解体新書まで」の論文の要旨と研究の特徴について適切に述べ、その重要性、独自性を示した。

特に18世紀中期から19世紀初期の江戸時代に編さんされた解剖図について、美術・絵画史の視点、造形的観点に立って、解剖図を描いた画家達の活動とその表現内容（形式）の研究成果や西洋解剖書付図とからの影響と日本人が腑分けを行ったときの写生図との関連を日本とヨーロッパの合わせて22冊の付図の綿密な対比を通じて影響関係と解剖図の表現の特徴を明らかにした成果は十分理解することができる発表であった。

その会において発表や展示された作品に対して質疑応答がなされたが、審査委員及び出席者からは論文の内容のみならず、できる限り集めることができた。解剖図を載せた論文別冊についてもこれからの研究者に資するなど高い評価を得た。また、多くの質問に対して博士としての十分な学識の蓄積が確認された。

以上のことから博士学位論文等を博士（芸術）の学位授与に相当するものとして、最終試験合格とする。

以上